日本近代文学会　関西支部
会報　三六号
二〇二二年一〇月一日

会報

■巻頭言

会費制への移行と、新制度の導入

西尾　元伸

二〇二二年度の関西支部春季大会は、オンライン形式での開催となった。二〇二一年度の春季・秋季大会に続いて三大会連続のことである。過去二回のオンライン大会とは異なり、特集「鷗外をひらく　鷗外没後一〇〇年」を含めてキイ・ステーションを設けない完全オンライン方式であった。関係者の負担を考えてのことであったが、質疑応答やディスカッションは問題なく実施できるのか等の不安もあった。結果として、オンライン上の会場に多くの方がご参加くださり、無事に大会を終えられたことに安堵している。影で、発表者や運営スタッフが打ち合わせをくり返し、準備を重ねたことも申し添えておきたい。ただし、懇親会の時間を持てなかったことには、残念な気持ちもある。

二〇二〇年以降、新型コロナウィルス感染症（COVID-19）の流行があり、私たちの生活は大きく様変わりした。オンラインの活用が急激に進み、学会のオンライン開催はふつうのこととなった。大学の授業なども、随分オンラインに救われたところがあったが、これについては対面形式に戻ったところが殆どなのだろう。関西支部の運営委員会も、この二年半程の期間はずっとオンライン開催である。もっとも必要に迫られてオンライン化したところが思った以上に便利だったこともある。支部運営委員会などは、経費の面からも大変に助かっている。執筆現在（七月上旬）、第七波の到来が言われており、しばらくはこの状況が続きそうである。

このような状況ではあるが、二〇二二年度は、関西支部にとって大きな変化の年になった。この場を借りて、そのことを記録しておきたい。本年度の総会で、会費制への移行が認められた。新たな会則は、二〇二三年度からの施行となる。会費制への移行は、支部にとって積年の懸案事項であり、この間、運営委員をはじめ多くの会員が意見を交換し、議論を重ねてきた。その議論に結論が出た形である。今後は、予算規模を見定めて、安定的に事業を継続することが可能になる。

同時に、積極的に支部運営を活性化する制度も認められた。会費制移行にあわせて、関西支部独自の会員制度として「K会員」が導入される。来年三月に予定されている（WEB版）支部機関誌「関西近代文学研究」の創刊とあわせ、支部のあらたな特色になるはずである。ともに、佐藤秀明支部長の強力なご牽引があって実現した制度である。支部の活動が、近現代文学研究の推進力になるとともに、関西らしい活力に溢れたものになることが期待される。また、運営に携わる者としては課題でもある。

さて、二〇二二年度秋季大会は、一〇月二二日（土）・二三日（日）に全国大会（於・同志社大学）内で開催の予定である。運営委員会では、本部、会場校と協力して、大会の準備をすすめている。多くの会員の皆さまのご参加を賜ることができれば幸いである。

■大会印象記　二〇二二年度秋季大会

自由発表

中田　睦美

河内美帆氏の発表「第三次『新思潮』創刊号と出発期の豊島与志雄」は、副題にあるように「同時代の文学潮流を視座に」豊島の作家としての出発期を考察する試みである。氏は、新思潮派は一般に反自然主義的と目されるが、出発期の豊島を最初に評価したのは、自然主義文学の牙城「早稲田文学」に拠る評論家や詩人だったとし、それもかつて花袋や抱月らが重視した象徴派的傾向の評価だとする。早稲田派には遠い上田敏らも、事物の奥に潜む〈深さ〉を鍵語とし、我と生命、個と全体の一体化などを重視する象徴主義的傾向を有し、その点では早稲田派も新思潮派も大差がないと見る。「湖水と彼等」と同時掲載の評論も同質で、豊島もそのトレンドに一見収まると見えて、実はそこから逸脱する志向があったとし、「湖水と彼等」「恩人」「犠

牲」の三編にはむしろ信仰や生命主義の否定が描かれたと分析する。会場からの指摘もあったように〈新思潮派〉の括りや大正生命主義や先行研究への目配りなどに肌理の粗さはあるが、三編の分析自体は興味深いので、まずはここにフォーカスし、豊島文学の独自性を彼の専攻した仏文との関係などから検討してみてはと感じた。

自由発表

原　卓史

西田正慶氏「戦中派世代の殺人――坂口安吾『復員殺人事件』と高木彬光『樹のごときもの歩く』――」は、安吾の作品を高木がどのように書き継いだのかを論じた発表である。一九五〇年代半ばの荒正人の市民社会論はミステリの批評にも適用されたが、安吾の作品はそれに還元されないことを明らかにした。一方、高木は「復員殺人事件」が否定した世代論を作品の核に据えたことを明らかにした。市民的「善」を称揚するのではなく、裁き得ない「悪」を日本的市民の一様相として剔出した物語へと変貌させたという。質疑応答では、安吾の楽天性とは何かといった問いや、五〇年代後半の他のアプレゲールを描いた作品と比べた場合、「復員殺人事件」はどう位置付けられるか、などの問いがあった。戦後の探偵小説文壇を広く見通す質問が出されて興味深い。個人的には「復員殺人事件」初出直後の近代文学派の反応や、犯人当て懸賞は「犯人」を探ろうとする「読者の心理を撹乱する試み」にどのような相互作用を起こしたのか、などについても聞いてみたかった。

自由発表

山中　智省

筒井康隆の短編小説「東海道戦争」をめぐっては、作中で描かれる戦争の様相を取り上げ、「疑似イベント」の概念や戦争の「ドタバタ性」と関連づけて論じられることがこれまで多かったという。こうしたなか松山哲士氏の発表は、戦争に巻き込まれる若者の姿に着目した点に特徴があった。松山氏はまず、若者が戦争映画の「カッコいい」面のみを受容して理想と憧れを抱きつつも、最終的には戦争の凄惨さに翻弄されて死を迎えるという作中描写と、戦争映画や若者像をめぐる同時代言説とを相互に分析した。その上で、本作が戦後二〇年当時、現実の若者に生じた戦争体験の風化や、当事者意識の欠落を風刺していたと論じたのである。

質疑応答では、主人公「おれ」の最期が示唆するものなど、作中描写に関する質問に加え、ＳＦ業界も視野に入れた本作の評価の歴史や、同時代の戦争映画や社会状況との関連性をさらに追う作業の必要性が指摘された。これにより、今後、文学研究において本作を論じる意義や見通しが、より明確になったと思われる。

小特集　鷗外をひらく

檀原　みすず

今年は森鷗外の没後一〇〇年という節目の年を迎え、特集「鷗外をひらく」では三本の発表があった。まず、八原瑠里氏「森鷗外と横光利一――「国語教育」を視座として――」は、現代の国語教科書に掲載された作家という共通点をふまえ、世代の離れた鷗外と横光を比較することで、国語教育の観点から両作家の共通性を探っていき、二人の受けてきた教育の差異から言葉に対する問題意識を中心に分析された。明治の国字・国語問題から国語科調査会設立の経緯を詳しく調査され、鷗外の『心頭語』にも言及された。鷗外『大発見』中の「縄」と「端緒」の文字表現に関しては、横光『上海』中の「暴動」と「革命」の使い分けとの類似性を指摘されたが、鷗外作品の読解に丁寧さが欲しかった。そして明治期に言文一致を目指して新しい文体を作り後世に影響を与えた鷗外と、国語教育により標準語を前提として文体を改革しようとする横光の姿を浮かび上がらせた。質疑応答では、鷗外『高瀬舟』について教育現場からの声が聴けて、鷗外の文章の力は現在を生きる若者の心にしっかり届くという実感ができ、意を強くした。

次に坂崎恭平氏の「〈あそび〉としての文学――二葉亭四迷から考える中期の諸作品――」は、二葉亭の文学に対する〈あそび〉の認識と鷗外の短編小説『あそび』を結節点としてその枠組みを通して二人の同時代的営為について考察された。氏は、二葉亭のいう〈あそび〉の意義を検討した上で、鷗外『あそび』の同時代評を丹念に調べ、余裕・余技という否定的な捉え方から大逆事件下に発表された『ファスチェス』以降、批評意識が先鋭化し、二葉亭の「遊びがあって不可」という姿勢に鷗外が転じて〈創作的批評〉の評が固着していく、と筋道を立てて整理された。そして二葉亭から鷗外をみて、「爆裂弾を抱いて発つ」ものとしなかった鷗外は、二葉亭のミッションについての一つのアンサーとして位置づけられるのではないかと結ばれた。私見では、鷗外の〈創作的批評〉は戦闘的啓蒙時代と呼ばれる初期のドイツ三部作や翻訳作品にも〈批評〉が内在していると考えられる。

最後に林正子氏の「〈Resignation〉の創作力――「鷗外文話」から史伝まで――」は、随筆『予が立場』（明治42）で用いられたresignationが漱石晩年の「則天去私」と共に鷗外の立場・心境を表す言葉としてよく知られるが、そのresignationは文学活動の初期から最晩年までを貫流する鷗外文学の基調をなす鍵語である、とした上でその内実に

迫られた。たくさんの鷗外作品や資料を挙げて、鷗外の翻訳『ファウスト』に関するゲーテの〈諦念〉という意味は希薄であり、スピノザのように宗教的でもなく、〈傍観〉〈あそび〉〈余裕〉などresignationの多義性を分析考察された。糸口として「鷗外文話」「其十、小説中人物の模型」が鷗外の創作法を示唆しているとされたが、それと鷗外のresignationの思想的基盤がどのようにリンクするのか、詳しい説明が欲しかった。また今回の三人の発表は共鳴・交響し合っているとまとめられたが、短い時間の中ではその意図が伝わり難く、鷗外文学におけるresignationの範囲とその意義については未だ課題が残されているように思われる。

本特集が新たな鷗外研究の地平を切り拓くことになるのか、今後も作品追究の手堅い論考を積み重ねていくしかないという思いを持った。

小特集　鷗外をひらく

木村　有美子

鷗外没後一〇〇年に当たるのを機に、本年度の春季大会では、「鷗外をひらく」と題して三氏の発表があった。

八原瑠里氏は、「国語教育」という新しい視座から鷗外と横光を取り上げた。親子ほどの年齢差のある両者の、受けて来た教育・文体の改革のあり方の差異、影響関係を論じたが、発表中、最も魅力的だったのは『大発見』に関する指摘である。作中の〈端緒〉をめぐる「僕」と「閣下」の言語の違いは、横光の『上海』での〈暴動〉と〈革命〉の使い分けに類似すると言う。言語はその人物の認識を示すのである。鼻をほじるという行為も書物に記されることによって事実として認知され、文字・言葉が読者の中に新しい認識や概念を生じさせる。この現象を「大発見」と呼んだのだという指摘も、横光の『雁』に対する高評価の紹介とともに興味深かった。

坂崎恭平氏は、鷗外と二葉亭四迷をめぐる〈あそび〉を取り上げた。〈遊びがあって不可〉と文士であることを拒否した二葉亭と、その名も『あそび』という作品を発表した鷗外。国家有為の人物たらんとする意識、自分の立場を弁明せずにはいられない性向等、日本の近代文学を拓いた両者には共通項もあるようだが、西園寺侯の文士招待会や文芸委員会への対応を見れば、坂崎氏の指摘どおり鷗外と二葉亭は対極の立ち位置にある。しかし鷗外の〈あそび〉＝二葉亭が排斥した遊戯分子なのだろうか。鷗外の〈あそび〉はそう単純ではない。〈Resignation〉〈平気〉との関係、「朝日新聞文芸欄」の森田草平評や「太陽」の「文壇の現況特集」との関連を視野に入れた分析が必要であろう。

林正子氏は鷗外の心境を表す〈Resignation〉について、鷗外の文学活動の初期から史伝執筆期を通底する〈鷗外文学の思想的基盤〉を示す鍵語であると論じた。〈Resignation〉（〈あそび〉〈平気〉等も含めて）を『予が立場』以降のものと捉えていた私には、初期をも視野に入れての論に学ぶところが多かった。ただ、〈断念〉をテーマとした初期の作品と「中央公論」（明42・9）等他者を意識した明治四十二年以降との間に質的な差異はないのだろうか。そのあたりを詳しく伺いたかった。

なぜ鷗外が〈Resignation〉と原語で記さずにはいられなかったのか、〈諦念〉との微妙な差異を、〈止揚〉と〈受容〉で説明されたのは、長年の研鑽あってこそであろう。二十三頁のレジュメは私には有難いものだったが、詳論する時間がなかったのがいかにも残念であった。

■書評

廣瀬陽一　著

『中野重治と朝鮮問題
――連帯の神話を超えて――』

萬田　慶太

本書は廣瀬陽一氏による『中野重治と朝鮮問題』という問題系を考察した研究書である。中野重治の朝鮮問題については、「雨の降る品川駅」を中心に様々に論じられてきた。しかし、多くの研究者が見落としがちであったことは、中野重治の朝鮮問題についての発言が、そもそも戦後に行なわれたということである。同時に中野は戦中の思い出を語るという形式を取ったので、さらに複雑な日本近代と朝鮮に関するアナロジーとして問題が提起されていた。こういった複雑な状況をひも解く観点を本書は提供している。

本書は六章構成である。第一章では中野が戦後、日本文学を「被圧迫民族の文学」として定義したことへの考察が展開され、朝鮮戦争下の状況として「司書の死」が論じられる。第二章では『梨の花』論を中心に、父の賃金から国を奪われた朝鮮の王さまへ想像力を広げる良平像が示される。第三章では、「模型境界標」と金達寿の小説「朴達の裁判」を比較しながら、日本人とはまったく異なる朝鮮人の転向への考察が検討される。第四章では、反安保闘争とアジア・アフリカ植民地独立からの影響から中野の石川啄木論のインタナショナリズムが論じられる。第五章では、「プロクラスティネーション」と『レーニン素人の読み方』における少数民族の権利が論じられる。第六章「在日朝鮮人と全国水平社の人びと」と『緊急順不同』における晩年の中野の日本共産党批判と朝鮮への認識の深化が論じられた。

本書を貫くものは、中野重治の「被圧迫民族の文学」に対する考察である。これまで「被

圧迫民族の文学」は日米安保を迎える戦後日本の状況と植民地朝鮮の事態を混同してきたと判断されてきた。しかし、そもそも朝鮮を取り巻く状況は「敵対的共犯関係」と定義されるものである。親日と反日や親米と反米のような単純な二項的図式によって朝鮮問題は裁断されるものではない。著者の定義によれば、反安保の「連帯」を行ないつつあった中野重治は、近代日本の体験を時にフラッシュバックさせながらも、世界の「敵対的共犯関係」に対する闘争を開始していたわけである。

戦後の中野のテクストは文学的想像力が政治テクストに貫入しており、非常に難解である。間違いなく本書は戦後中野重治研究の今後の基礎となり得る良書であろう。

（二〇二一年十二月二八日
青弓社　二九二頁　定価
二八〇〇円＋税）

木村小夜　著

『問いかける短篇　翻案・童話・寓話』

須田　千里

太宰治研究者として知られる著者による作品論集である。本書の内容を大まかに紹介した「はじめに」以下、全四部九章から成る。すなわち、「Ⅰ　錯誤と死角」では夏目漱石『夢十夜』（特に「第二夜」と「第六夜」）、森鷗外「高瀬舟」、菊池寛「藤十郎の恋」が論じられ、「Ⅱ　〈型〉からの逸脱」では芥川龍之介「蜘蛛の糸」「魔術」、小川未明「赤い蠟燭と人魚」等一六篇が扱われる。「Ⅲ　反復と変質」では、「異形の兄姉・饒舌な弟妹」の章で江戸川乱歩「押絵と旅する男」と岩井志麻子「ぼっけえ、きょうてえ」が、「戦後短篇管見」の章では安部公房「手」、石川淳「灰色のマント」、吉行淳之介「童謡」が、「三島由紀夫自選短編集『真夏の死』の諸相」では『真夏の死』所収の六篇が取り上げられる。「Ⅳ　連作のメタフィクション」では、森見登美彦『新釈　走れメロス　他四編』（「山月記」「藪の中」「走れメロス」「桜の森の満開の下」「百物語」）における翻案が分析される。これらは、一九九六年から二〇一八年にかけ、主に『福井県立大学論集』に発表された初出稿に大幅な加筆訂正を施したもの。いわゆる実学系学部の学生に向けた教養としての国文学講義と、ゼミの発表のために学生自らが選択した短篇小説について考え直したものが多い（「あとがき」）とのことである。

本書の目的は「短篇小説のプロットが内包する謎を発見し、作品内部とそのごく近くにある言説を極力手がかりとして謎を解きほぐし、読みを深めていくこと。」（「はじめに」）である。そのために、作中の「因果関係の構造」「繰り返し」が注目され論が進められる。典拠・材源との対比に注力しつつ作品を読み解いてゆく著者の手際は、これまでの太宰治研究によって培われたものであろう。

与えられた紙数の関係で、第一章「光源としての錯誤――夏目漱石『夢十夜』――」しか言及できないが、『夢十夜』各篇の主旨を「語り手あるいは主人公達の錯誤の意味から」捉える着眼や、「第二夜」で「自分」（侍）が悟った証拠としてなすべきは、「侍なら悟れぬ筈はなからう」と挑発する当の和尚の前に、侍の証である短刀を捨てに行くことだという読みは新鮮だった。

先行研究も丁寧に目配りされており、読みに始まり読みに終わる作品論、文学研究の王道を行くものといえよう。

（二〇二二年三月三〇日
和泉書院　三五四頁
五〇〇〇円＋税）

■新刊紹介

外村彰　編

『昭和の文学を読む
内向の世代までをたどる』

武久　真士

本書は戦前のモダニズム文学から戦後の内向の世代まで、ジャンルや文学流派などで時代を区切りながら、昭和文学の流れを「概観」（iii ページ）したものである。全一一章。各章の冒頭には「問い」が記され、末尾に扱われた作品のテキストが掲載されている。これは本書が「講読用テキスト」（iv ページ）として用いられることも想定しているためで、他のテキストなどを買わずとも、一冊あれば資料が完結するように構成されている。加えて、末尾には各章の内容に関わるブックガイドも用意されている。本書で基礎的な事項を確認し、他の書籍に関心を広げていくという使用法も期待できるだろう。

また、詩歌や児童文学、演劇などしばしば省略されがちな分野の文学史までカバーしている点も重要だ。多分野から文学史を眺めることで、より立体的な知識を身につけられるよう工夫されている。本書は、読者が昭和文学史を鳥瞰して教科書的な事実を学び、そこから自分なりに文学史について考えていくための入門書として様々な場所で活躍することだろう。

（二〇二二年四月六日
ひつじ書房　二八六頁
二〇〇〇円＋税）

■事務局だより

◆二〇二一年度支部報告ならびに二〇二二年度支部活動につきまして、会員諸氏より承認をいただきましたことをご報告し、御礼申し上げます。

◆関西支部会則の改定について

二〇二二年六月四日の総会において、関西支部会則の一部が改定されました（傍線部を追記または変更）。

第三条（事業）

本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

一、総会の開催。諸問題が発生した場合は臨時総会を開催する。議事は出席者の過半数の同意をもって決定する。緊急事態などにより総会開催が不可能な場合は、郵便や電子媒体等を用いて総会とすることができる。

第四条（会員）

一、本会は、N会員とK会員をもって組織する。

二、N会員は日本近代文学会の会員であり、第十二条に定める会費を負担する者である。

三、K会員は日本近代文学会の会員ではないが、第十二条に定める会費を負担する者である。

四、この会への入会には、運営委員会の承認を得なければならない。

五、この会の退会は、運営委員会の承認を得なければならない。

第五条（役員）

本会に次の役員を置く。

一、支部長　一名　運営委員　若干名
　編集委員　若干名　会計監査　二名

二、運営委員と編集委員は、各委員会でN会員から候補者を選出し、総会の承認を得る。

三、支部長は、運営委員によって構成された選考委員会でN会員から候補者を選出し、総会の承認を得る。

第八条（経費）

本会の経費は、日本近代文学会会則別則第四の規定と、第十二条に定める会費による。

第十二条（会費）

会費は、年額三〇〇〇円とする。

会費をつづけて二年分滞納した場合は、原則として退会したものと見なす。

附則

二〇二二（令和四）年六月四日の総会で改正承認

二〇二三（令和五）年四月一日施行

※変更後の会則全文は、施行日までに、日本近代文学会関西支部公式ＢＬＯＧ（https://kinbun-kansai.sakura.ne.jp/blog/）に掲載されます。

◆献本のお願い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍…支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先…関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否、時期、および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

◆機関紙『関西近代文学』（創刊号）原稿募集のお知らせ

二〇二二年十一月五日（土）が締切です。詳しくは関西支部の公式ＢＬＯＧをご覧ください。なお創刊は、二〇二三年三月を予定しています（電子版のみの発行となります）。

◆維持会費納入のお願い

維持会費の納入者がたいへん少ない状況です。同封の振込用紙で、ご協力のほど、何卒よろしくお願いします。

◆二〇二二年度運営委員

支部長　佐藤秀明

運営委員長　西尾元伸

運営副委員長　瀬崎圭二　中田睦美

〔会計・名簿〕　熊谷昭宏　花崎育代　藤原崇雅　八原瑠里

〔会報〕　石原深予　永渕朋枝　福田涼　松田樹　禧美智章

〔企画〕　浅井航洋　斎藤佳子　東口昌央　長濱拓磨　光石亜由美　矢本浩司

〔広報〕　廣瀬陽一

〔書記〕　塚本章子　開信介　宮川康　吉川仁子

〔事務局補助〕　西薗有加利

◆二〇二二年度『関西近代文学』編集委員

編集委員長　佐藤秀明

編集委員　太田登　木田隆文　木谷真紀子　田中励儀　檀原みすず　西尾宣明　増田周子

日本近代文学会関西支部事務局

〒六三一-八五〇一

奈良市帝塚山七-一-一

帝塚山大学　文学部　西尾元伸研究室内

日本近代文学会　関西支部

会報　三六号　二〇二二年一〇月一日

編集・発行人　佐藤秀明

日本近代文学会　関西支部

〒六三一-八五〇一

奈良市帝塚山七-一-一

帝塚山大学　文学部　西尾元伸研究室内

❖瀧口の芸術観・作品について未探究の側面に光を当てる

瀧口修造研究―〈影像人間〉の系譜

秋元裕子　日本におけるシュールレアリスムの第一人者、詩人・美術批評家の瀧口修造について論じた本書独自の視点は、瀧口の美学を貫く特質の中心に影像に対する彼の考え方を据えていることにあり、瀧口が創造原理として重視した想像力の系譜を浮かび上がらせることにある。

新刊・定価６６００円〔税込〕

❖子規短歌の本質に迫る

子規のうたごゑ

半田美永　二十代後半に、講談社で『子規全集』の編纂に関与した著者は、愛媛大学の和田茂樹教授の下で、子規資料の分類と解析の指導を受けた。当時を回想し、またその後の歩みから湧き出た思惟をエッセイ風に綴り、子規短歌の本質に迫ろうとした記念碑的な一書。

定価２２００円〔税込〕

❖漱石から森見登美彦まで、短篇の構築性を解き明かす論集

問いかける短篇―翻案・童話・寓話―

木村小夜　視点人物の錯誤や死角・物語が孕む矛盾・構成上の断絶・変則的な因果の構図や定型からの逸脱・反復の中の変化に着目、原拠や周辺の諸言説との比較検討を通し、漱石・鷗外・芥川から三島などの戦後作家、さらに直近の現代作家の短篇に即して、その緻密な構築性を解明する。

新刊・定価５５００円〔税込〕

❖昭和の文豪・井上靖の文学の解明を目指す

井上靖の文学―一途で烈しい生の探求―

高木伸幸　習作期から最晩年まで井上靖のほぼすべての代表作を取り上げ、その文学全容の解明を目指す。従来の井上靖論には見られない幅広く実証的な作品論とともに、貴重な資料篇を備え、研究史上に新生面を拓く画期的な一冊。

新刊・定価７４８０円〔税込〕

❖鏡花研究の未来への展望をひらく画期的な論集

論集 泉鏡花　第七集

泉鏡花研究会編　十一篇の書き下ろしの論考と、最も詳細な「参考文献目録」とを合せもって、泉鏡花研究の最前線を示すべく編集。

近刊・価未定

好評既刊（各税込）

第一集	６６００円	第二集	６６００円
第三集	５５００円	第四集	６６００円
第五集	８８００円	第六集	７７００円

❖結婚を相対化する主体と親密性の実践を文学作品より抽出

結婚の結節点―現代女性文学と中途的ジェンダー分析―

泉谷　瞬　１９８０年代から現在に至るまで活躍する女性作家たちの小説を、結婚制度とそれにまつわる社会状況を照合しながら多角的に考察する。既存の「結婚」を相対化する主体と親密性の実践を、文学作品より探る。

定価３９６０円〔税込〕

❖古典落語の豊かな鉱脈

古典落語の史層を掘る

高島幸次　古典落語は、江戸後期・明治期の世相を踏まえて成立したが、現代では、その世相は落語の史層に埋没し、落語は薄っぺらな作り話だと誤解されている。本書はその史層を掘り起こし、本来の落語の面白さを考える。

新刊・定価２８６０円〔税込〕

❖なぜ、テレビは凋落したのか

平成期放送メディア論

―テレビからインターネットへの転換はどのように進んだのか

辻　泰明　メディアの王者として君臨していたテレビが、インターネット動画にその座を明け渡そうとしている。なぜ、テレビに代わってインターネット動画が発展したのか。平成期放送メディアの興亡を通して未来への示唆を探る。

定価２２００円〔税込〕

大阪近代文学事典

日本近代文学会関西支部大阪近代文学事典編集委員会編

和泉事典シリーズ16　定価５５００円〔税込〕

滋賀近代文学事典

日本近代文学会関西支部滋賀近代文学事典編集委員会編

和泉事典シリーズ23　定価８８００円〔税込〕

兵庫近代文学事典

日本近代文学会関西支部兵庫近代文学事典編集委員会編

和泉事典シリーズ26　定価５５００円〔税込〕

京都近代文学事典

日本近代文学会関西支部京都近代文学事典編集委員会編

和泉事典シリーズ29　定価６３８０円〔税込〕

鉄道　関西近代のマトリクス

日本近代文学会関西支部編

和泉ブックレット1　定価９９０円〔税込〕

近代文学のなかの〝関西弁〟

―語る関西／語られる関西―

和泉ブックレット3　定価１２１０円〔税込〕

文学研究における継承と断絶

―関西支部草創期から見返す―

和泉ブックレット5　定価１１００円〔税込〕

海を越えた文学　日韓を軸として

和泉ブックレット7　定価１１００円〔税込〕

村上春樹と小説の現在

定価２６４０円〔税込〕

作家／作者とは何か

―テクスト・教室・サブカルチャー―

定価３９６０円〔税込〕

〒543-0037　大阪府大阪市天王寺区上之宮町7-6
TEL 06(6771)1467／FAX 06(6771)1508
和泉書院
https://www.izumipb.co.jp
e-mail：info@izumipb.co.jp

いずみ通信呈上
価格は10%税込　(2022.10)